

A decorative border with a repeating floral and vine motif surrounds the entire page. The border is composed of small, stylized flowers and leaves connected by a continuous line.

日本古典集成

蜻蛉日記

犬養廉校注

新潮社版

新潮日本古典集成（第五四回）
蜻蛉日記



定価一八〇〇円

昭和五十七年十月五日 印刷
昭和五十七年十月十日 発行

校注者 犬養 廉

発行者 佐藤 亮一

印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 株式会社 新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一
電話 東京03(二六六)五一二(業務)
東京03(二六六)五四二(編集)
振替 東京 四一八〇八

装画 佐多 芳郎
組版 シーティエス大日本
製本 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

凡例 三

上（天曆八年～安和元年） 九

中（安和二年～天祿二年） 八七

下（天祿三年～天延二年） 一八三

卷末歌集 二七三

解説 二八九

付録

蜻蛉日記関係年表 三〇六

蜻蛉日記関係系図 三五一

和歌索引 三五四

凡 例

一、本書は、現代の読者に『蜻蛉日記』の最も読みやすい本文を提供し、独力で味読できるように校注・解説をこころみたものである。

一、本文は、現存諸本中、最も善本と目される宮内庁書陵部蔵御所本『蜻蛉日記』三巻を底本として、巻末付載の歌集及び勘物をも収録した。翻刻にあたっては、次の方針に従った。

1 本日記は、諸本ともに本文の乱れが甚だしく、底本もまた例外ではない。よって適宜、改訂を施したが、その場合は能う限りその旨を頭注に明示した。

2 本文は、読解の便宜を考え、段落を分かち句読点・濁点を付し、随時、仮名を漢字に改めた。頭注欄の小見出し（色刷り）は、段落ごとの主要記事あるいは心象風景によった。

3 表記は、送り仮名を補い歴史的仮名遣いに改め、漢字はすべて通行の字体に統一した。

4 反復記号「く」「ゝ」は用いず、「またく」「またまた」「こゝろ」↓「こころ」のごとく改めた。

5 会話・手紙の類には「」を付し、（ ）によって話者・筆者を示し、和歌も同様の方法で詠作者を示した。

6 漢語・漢字には適宜、歴史的仮名遣いによって振り仮名を付した。

7 なお、底本に現れる同一語で表記の異なる場合は底本のままとした。「さうずく」↓「装束」^{さうずく}、「さうぞく」↓「装束」^{さうぞく}のごとくである。

一、傍注の現代語訳（色刷り）は、頭注とあい補って、原文の通読が容易なように工夫した。ただし紙面の関係で一部を頭注にまわしたところもある。

一、傍注で本文にない言葉を補う場合は「」印を付した。

一、頭注には、語釈・文法・引歌及び固有名詞の説明などを掲げ、本文上・解釈上の問題点をも指摘した。また必要に応じ、*印の注を設け、読解の一助とした。

一、巻末の「解説」は、『蜻蛉日記』の内外の世界、すなわち作者と作品とその時代を全体的に理解するための手引きとして編んだものである。

一、なお付録として、「蜻蛉日記関係年表」「系図」及び「和歌索引」を掲げた。

一、本書の頭注に引用した注釈書の略号は次のごとくである。

『解環』 『かげろふの日記解環』 坂徴・天明五年

『解環補遺』 『かげろふの日記解環補遺』 田中大秀・文政九年

『紀行解』 『遊絲日記紀行解』 田中大秀・文政十三年

『講義』 『蜻蛉日記講義』 喜多義男・武蔵野書院・昭和十二年（増補改訂版・至文堂・昭和十九年）

九年）

『大系』 『かげろふ日記』 川口久雄・岩波書店日本文学大系・昭和三十二年

『全講』 『全講蜻蛉日記』 喜多義男・至文堂・昭和三十六年

『全注釈』 『蜻蛉日記全注釈上下』 柿本奨・角川書店・昭和四十一年

『校注』 『校注古典叢書蜻蛉日記』 上村悦子・明治書院・昭和四十三年

『注解』 『蜻蛉日記注解』 秋山虔・上村悦子・木村正中・「解釈と鑑賞」昭和三十七年五月、

昭和四十六年三月

『新注釈』 『蜻蛉日記新注釈』 大西善明・明治書院・昭和四十六年

『全集』 『蜻蛉日記』 木村正中・伊牟田経久・小学館日本古典文学全集・昭和四十八年

『総索引』 改訂新版 『蜻蛉日記』 新訂版 『蜻蛉日記』 木村正中・伊牟田経久・小学館日本古典文学全集・昭和四十八年

一、本書の校注にあたっては、先学の諸注釈・研究論文等に負うところが大きかった。就中、『全注釈』『注解』『全集』には多大な恩恵を蒙った。記して衷心より謝意を表する。

蜻蛉日記

蜻蛉日記 上

一 御覧のように。「かく」は、以下の日記の内容をさす。この唐突な書き出しは、作者の日常を既に見聞している身辺の者に語りかける趣があり、序文は、少なくとも上巻脱稿後に付加されたものであらう。

二 兼家の妻であるような、ないような中途半端な状態で。兼家の妻であるなら確たる生活の基盤が、全くの他人であるなら宮仕えか再婚の道も選べよう。だがそのいずれともつかない不安定な現状で。

三 「人」は三人称。一人の女の人生としてこの日記を跡づけようとする物語の表出。

序

四 事に処してゆくための智慧才覚。

五 何の役にも立たない、無気力な状態で。

六 当時流行していた作り物語。荒唐無稽な綺麗ごとの、多くはハッピーエンドで局を結ぶ物語。

七 「世におほかる」は前文の「世の中におほかる」と同趣の反復。「そらごと」は、非現実的な作りごと。「だにあり」は、「だにめづらしきさまにあり」の略。

八 日記としてあからさまに綴つたなら（まして）。

九 世間の人、古物語の読者たちが。「天下の人の」は「問はむ」の主語。他に、「天下の」を「人の品高き」を最大限に強めた連体修飾として、「この上もない身分の高い人」と解く考え（『注解』ほか）もある。

一〇 身分の高い殿方（の夫人たる者）の、実際の生活はどんなものかと。「や」の後に「いかに」を補う。

一一 克明ではないが、まあこの程度でこと足りようといった曖昧な記事内容。

「このように浅いで来た歲月も流れて、まことに頼りなく、二どつつかずのあかくありし時過ぎて、世の中にいとものはかなく、とにもかくにりさまで、世に経る人ありけり。かたちとても人にも似ず、心魂もつかで、あるわけでもないの、無理はないと思もあるにもあらで、かうものの要にもあらであるも、ことわりと思ひつつ、ただ臥し起き明かし暮らすまに、世の中におほかる古物語の端などを見れば、世におほかるそらごとだにあり。人にもあらぬ身の上まで書き日記して、めづらしきさまにもありなむ。天下の人の、品高きやと、問はむためしにもせよかし、とおほゆるも、過ぎにし年月ごろのことも、おぼつかなかりければ、さてもありぬべう適当な記事が多くなつてしまつた。二これでよからうといきことなむおほかりける。」

一 通り一遍の淡々しい。

天曆八年——兼家の求婚

底本は「あのけかりし」とあるが、「あはつけかりし」と改める説（「解環」）に従った。

二 「すきこと」は恋愛。男性の懸想に対する臨機の応酬。

三 名門の貴公子兼家（当年二十六歳）から。「柏木」は兵衛・衛門の異名。兼家は天曆五年五月以来、右兵衛佐。「木高き」は「柏木」の縁語で、兼家が藤原北家の嫡流右大臣師輔の子息であることによる。

四 「かく」は求婚の意思表示をいう。以下の記事内容を先取りした表現。

五 仲介の労を取る然るべき縁故者。つて。

六 作者の父藤原倫憲。「とおぼしき」は體化表現。

七 作者本人の意向。身分柄不釣合、の意。もつとも、この求婚は受領の娘に降って湧いた玉の輿で、作者の内心は満更でもなかったはずである。

八 使者から手紙を受け取り、奥に取り次いで、そこでまた大騒ぎをする。

九 こうした際は、ことさら凝った料紙を用いると聞いていたが、そんなものでは、さらさらなく。

一〇 こういう場合は、すみずみまで心を配って、入念に書くものと常々聞いていた、その書き振りのも。「手」は筆跡。なお、この部分を「非の打ちどころもないと聞いていた兼家の筆跡も」と解く考えもある。

一一 お噂だけ聞いていて、お逢いできないのは切ない

一 うたかたのような 二 その場限りの恋の駆け引きなどはともかくとして 三 柏木の

さて、あはつけかりしすきことどものそれはそれとして、
木高きわたりより、かくいはせむと思ふことありけり。普通の人は、
案内するたより、もしは、なま女などして、言はすることこそあれ、
はしたな侍女などを介して、取り次がせるものなのだが

これは、親とおぼしき人に、たはぶれにもまめやかに、ほのめか
ししに、「びなきこと」といひつるをも知らず顔に、馬にはひ乗り
たる人して、うちたたかす。「たれ」など言はするには、おぼつか

（作者）七んでもないこと
使者を寄越して「わが家の門を」（家人）どなた様から
なからず、騒いだればもてわづらひ、取り入れてもて騒ぐ。見れば、

紙なども例のやうにもあらず、いたらぬ所なしと聞きふるしたる手
も、あらじとおぼゆるまで悲しければ、いとぞあやしき。ありける
（求婚の手紙とはとても思えないほどぞんざいなので、なんとも合点がゆかない）

ことは、
（兼家）お二
音にのみ聞けば悲しなほととぎす

ことかたらはむと思ふころあり
（作者）どうしまししょう お返事をしなければ悪いかしら
とばかりぞある。「いかに。返りごとはすべくやある」など、さだ

むるほどに、古代なる人ありて、「なほ」と、かしこまりて書かす
（母）やはりお返事を 恐縮して書かせるので

相談し

こと。是非とも、直接お目にかかつてお話したいと思つております。「ほととぎす」は、折柄の初夏の景物であると同時に、作者を譬えたもの。

二三 古風な人。母親をいう。

二三 このあたりには、お話相手になるような人もおりませんのに、いくらお便りを下さっても無駄でございます。贈歌の「ほととぎす」を、逆に兼家に取らしたものの。

二四 気がかりでなりません。一向に御返事のないところを見ると、貴女は音無しの滝なのでしょうか。私はあてでもない逢う瀬を捜しあぐねております。「音なき滝」は京都市左京区大原の歌枕、音無しの滝。

二五 態のよいことわりの言葉。

二六 正常な分別もないみたいだ。婉曲にことわつたにも拘らず、それを無視した（或いは気付かぬ）兼家の、次の歌に対する批評。なお、底本を「知りたるやうなりや」と改め、満更でもないこちらの内心を見すかしたように、と解く考えもある。

二七 心ひそかに、貴女からのお返事を、今か今かと待つておりますのに、梨の隣で、一向にお返事のないのがつらいことです。

二八 一人前の大人らしく、きちんと。

二九 こうした場合に、然るべく無難に返事ができるような女房に代筆させて。

れば、

(作者)^三
かたらはむ人なき里にほととぎす

かひなかるべき声なふるしそ

これをはじめにて、
再三手紙を寄越すけれども
またまたもおこすれど、返りごともせざりけ

れば、また、

(兼家)^四
おぼつかかな音なき滝の水なれや

ゆくへも知らぬ瀬をぞたづぬる

これを、「いまこれより」といひたれば、
(作者)^{一五}のちほどこちらから
痴れたるやうなりや、か

くぞある。

(兼家)^七
人知れずいまやいまやと待つほどに

かへり来ぬこそわびしかりけれ

とありければ、例の人、「かしこし。
例の母親が 畏れ多いこと
をさをさしきやうにも、きこ

えむこそよからめ」とて、さるべき人して、
二九
あるべきに書かせてや

りつ。
その代筆の手紙を 心底よろこんで
それをしも、まめやかにうち喜びて、
頻りに手紙を寄越す
しげう通はす。

一 結婚の承諾を求める父母宛の手紙に添えた文。

二 浜千鳥の足跡が波にかき消されるように、全然、お返事が頂けないのは、私以上のお方がいて、それで私など問題になさらないのでしょうか。「千鳥のあと」は文字(手紙)をいう。「なぎさ」は「渚」に「無き」を、「ふみ」は「踏み」に「文」を掛ける。「浜」「なぎさ」「ふみ」「越す」「波」は「千鳥」の縁語。下句は、「君をおきてあだし心をわが持たば末の松山波も越えなむ」(『古今集』東歌)、「浜千鳥頼むを知れとふみそむるあとうち消つなわれを越す波」(『後撰集』恋二、平貞文)などを本歌とする。

三 折目正しく真面目な。色めかしくない、の意。

四 代筆であろうと御自筆であろうと、こだわりなく嬉しくは存じておりますが、今度こそ、今までお返事の拝見できなかったお方(作者)のもとへさし上げたく。是非とも御自身のお返事が頂きたいもので。「見ぬ」は、兼家がまだ見ていない、の意。代筆ばかりゆえ、はたして自分の手紙が作者のもとに届いているかどうか、兼家にはそんな危惧がある。

五 男に騙されないよう、思慮深く構えていること。

六 ここは奥山ならぬ都の内。鹿の音も聞えぬ所に住んでいながら、不思議に眠れぬ夜を重ねております。これも貴女に逢えぬゆえです。「鹿の音」は、小牡鹿が妻を恋うて鳴くあわれな声。「あはぬ」は、目が合わぬ(眠れぬ)意に、貴女に逢わぬの意を掛ける。一首は「山里は秋こそことにわびしけれ鹿の鳴く音に目

また、添へたる文見れば、

(兼家)二 浜千鳥あともなぎさにふみ見ぬは

われを越す波うちや消つらむ

このたびも、例の、^三まめやかなる返りごととする人あれば、まぎらはしつ。^四またもあり。「まめやかなるやうにてあるも、いと思ふやう

なれど、このたびさへなうは、いとつらうもあるべきかな」など、

まめ文の端に書いて、添へたり。

(兼家)四 いづれともわかぬ心はそへたれど

こたびはさきに見ぬ人のがり

とあれど、例のまぎらはしつ。かかれは、まめなることにて、月日は過ぐしつ。

は過ぐしつ。

秋つかたになりけり。添へたる文に、「心さかしらづいたるや

うに見えつる憂さになむ、念じつれど、いかなるにかあらむ、

(兼家)五 鹿の音も聞こえぬ里に住みながら

を覚ましつづ」(『古今集』秋上、壬生忠岑)による。

七 鹿の多い高砂の高嶺あたりに住んでいたとしても、そんなに寝覚めがちになるとは聞いておりませんわ。「高砂」は兵庫県加古川市の歌枕。「秋秋の花咲きにけり高砂の尾の上の鹿は今や鳴くらむ」(『古今集』秋上、藤原敏行)を踏まえたもの。

八 兼家の贈歌の「あやしく」を逆手に取ったもの。

九 逢坂の関(貴女との逢う瀬の関)とは、何と忌々しいもの。すぐ近くだというのに、なかなか越えられないで嘆き暮しております。「逢坂の関」は京都府と滋賀県との境にある逢坂山に設けられた
いかなる朝関。

一〇 私の所は有名な勿来(来てはならない)の関です。あなたが越えられぬと嘆いておいでの逢坂どころではなく、もっと手強い関だとお含みおき下さい。

「勿来の関」は福島県勿来。

二 どんな朝だったかしら。兼家を初めて通わせた翌朝(後朝)の醜化表現。

三 貴女に再びお逢いできる夕暮れの訪れを待っている間、切なさに泣く私の涙は、とめどもなく、大井川となつて流れております。「夕ぐれ」の「くれ」は「暮」に「樽(山から切り出した原木)」を、「ながれ」は「流れ」に「泣かれ」、「おほゐ」は「多い」に「大井(京都の保津川の下流、嵐山付近)」を掛ける。一首は、夕暮れまでの待ち遠しさを、樽を筏に組んで大井川に流す趣向で仕立てたもの。

あやしくあはぬ目をも見るかな」

とある返りごと、

「高砂のをのへわたりに住まふとも

しかさめぬべき目とは聞かぬを

げにあやしのことや」とばかりなむ。

また、ほどへて、

逢坂の関やなになり近けれど

越えわびぬれば嘆きてぞふる

返し、

越えわぶる逢坂よりも音に聞く

勿来をかたき関と知らなむ

などいふまめ文、通ひ通ひて、いかなる朝にかありけむ、

夕ぐれのながれるまを待つほどに

涙おほみの川とこそなれ

返し、

(作者)^一 思ふことおほゐの川の夕ぐれは

ころにもあらずなかれこそすれ

また、三日ばかりのあしたに、

(兼家)^三 しののめにおきける空はおもほえで

あやしく露と消えかへりつる

返し、

(作者)^四 さだめなく消えかへりつる露よりも

そらだのめするわれはなになり

かくて、あるやうありて、しばし旅なるところにあるに、ものし

て、つとめて、^{翌朝}「今日だにのどかにと思ひつるを、ひなけなりつれ

ば。」^五 いかによ。身には山隠れとのみなむ」とある返りごとに、ただ、

(作者)^六 おもほえぬ垣ほにをれば撫子の

花にぞ露はたまらざりける

一 あなたがお見え下さるかどうかと、物思いの多い夕暮れには、ただもう不安でわれ知らず泣けてまいります——大井川に浮ぶ樽が、よるべもなく流れるように。贈歌の「大井川」を受けて、川の縁語で仕立てたもの。「夕ぐれ」は「樽」、「なかれ」は「泣かれ」と「流れ」を掛ける。

二 いわゆる三日夜。当時は、新郎が新婦のもとに、初夜より三夜通い続けて、はじめて婚姻が成立する。第三夜には新夫婦が小餅(三日夜の餅)を食べて祝い、翌朝は家中にも配って、婚姻の披露とした。露頭

三 夜明け前に起きて、そなたのもとから帰る(昨日までの)私の気持は、悲しみにかき昏れて物も覚え、露でもないこの身が、どうしたことか、消えも入りそうだった。「しののめ」は早暁。「おき」は「起き」から「置き」に転じて「露」「消え」が導かれる。「消えかへる」は「消ゆ」を強めた語。

四 朝日とともに消えはなくなり露のよう、とおっしゃるあなたよりも、そのあなたにはかない望みをたないでいるこの身は、一体何にたとえたらよいのでしょうか。「そらだのめ」は、あてにならない期待。

五 その後、どうしているか。見舞の挨拶。

六 思いもかけぬこの山里に来て、垣根の撫子を手折ってみると、ささやかな花から露がはらはらと落ちたことです。私の涙のように。「垣ほ」は垣根の歌語。

「をれ」は「居れ」と「折れ」を掛ける。